

## 妖気発する流麗なベース

超絶技巧のジャズベースリストとして1970年代半ばから活躍する傍ら、「ブルー・ノートと調性」などいくつもの難解な音楽理論書の著者でもある濱瀬元彦の名は、半ば伝説的に語られてきた。90年代後半以降、表舞台から消えていた彼が、最近久々に新作「The End of Legal Fiction」を出し、発売記念ライブをおこなった(6日、東京・青山のCay)。

参加。通常のベースラインではなく、もっぱら高音域でメロディーを即興演奏する濱瀬の6弦フレットレスベースは、流麗にして変幻自在。故ジャコ・パストリアスを彷彿させたりもする。そして、夢幻的に変容してゆくフラクタル模様のようなアンサンブル。今回の新作とライブは、以前発表したコンピュータ制御のアルバム収録曲をすべて人力(実演)でやり直そうという試みらしいが、なるほどここには、ちょっと他には例を思い出せないほど高度なテクニックが集積されている。

しかし僕が惹かれたのは、感嘆すべき演奏技術ではなく、音そのものから発せられるむせかえるような生命力と自律性である。人力か機械かの問題ではなく、この音の連なりこそが生み出す肉体的妖気。それは、濱瀬がしばしば用いる「エロス」という言葉に置き換えてもいいだろう。

ハーモニーとリズムの洗練を積極的に排除していった60年代以降のフリージャズに対する深い違和感を起点に、即興と作曲をいかに論理的かつ美しく統合するかを研究し続けてきた濱瀬の、一つの回答をそこに見た気がする。



濱瀬元彦(左)と菊地成孔  
|| 石動弘喜氏撮影